## 1．目的

　大学生が充実した学生生活をおくることができるかどうかは、多くの要素に左右されるが、「お金の問題」が1つの重要なポイントになることは間違いない。授業料や教科書代、一人暮らしの家賃・光熱費、学友との交遊費、部活・サークルの活動費など、大学生活にはさまざまな面でお金が必要になる。またその結果として、お金を稼ぐためのアルバイト時間が長くなり、生活を強く拘束することもある。

　このレポートでは、「お金の問題」の中でもいわゆる遊びのために使うお金に注目し、性別や学年によって、遊びのためのお金の使い方がどのように異なるのかを明らかにしようと思う。ここで「遊びのためのお金」というのは、趣味の買い物や遊興費、酒代など、それがなくても本来の学生生活は成り立つようなお金の使い道を指す。教科書代や光熱費と違い、このような遊びのためのお金は、人によって使い道や使う量が大きく異なるはずである。大学生活の予測しがたい「お金の問題」は、遊びのためのお金の使い方を間違えることによって引き起こされるのではないかと仮定する。

　大学生の遊び（消費活動）は多様であり、そのお金の使い道をあげるときりがないが、大雑把に考えれば、いくつかのお金の使い道に要約することができるであろう。このレポートでは、後に記すように因子分析によってお金の使い道の大枠（因子）を探索する。その上で、どの使い道にどれだけお金を費やすかが、性別や学年によってどのように異なるかを因子得点の比較で明らかにする。性別と学年による比較は、単純であるがどのような「お金の問題」がどの性別・学年で生じやすいのかを考える基礎情報が得られるであろう。

## 2．方法

　分析に用いるデータは、2008年9～12月に実施した「大阪の大学生の比較調査」のデータである。この調査は、大阪の4つの大学（大阪商業大学、大阪産業大学、近畿大学、大阪大学）の学生を対象にした集合調査で、各大学で1、2個の授業を用いて計347名の回答を集めている。集合調査のため回収率は算出できない。複数の調査テーマ（大学生の交遊・将来設計・マナー）を並列させたオムニバス形式の質問紙であるが、お金の使い方についての質問項目が含まれているので、ここでの目的に合致している。なお、4年生以上の学生はケースが少なかったので、ここでは1～3年生の回答者313名のみを分析に用いた。

　具体的な質問項目としては、Q13で「次の事柄について、1か月にどのくらいお金を使いますか」と尋ね、10個の事柄（外食費、お酒［外食除く］、タバコ、本、服飾、家庭用ゲーム、ギャンブル、DVDやCD、カラオケ、ゲームセンター）のそれぞれに使うお金の量を7択で回答してもらっている。7択の選択肢は、それぞれの中間値で、0円、500円、2000円、4000円、7500円、20000円、40000円にリコーディングした上で分析に用いる。

　これら10個のそれぞれを詳しく見ることは煩雑なので、10個の項目を因子分析にかけることで、「遊びのためのお金」の使い道を少数の因子に要約する。固有値が1以上の因子を採用する基準で、最尤法、バリマックス回転を使用し、適切な因子を抽出する。

　さらに、抽出された因子それぞれについて因子得点を算出し、性別と学年の組み合わせ（2×3＝6通り）のグループで、平均点を比較する。これによって、それぞれのお金の使い道について、どの性別・学年で使う量が多くなるのかを要約的に知ることができる。

## 3．結果

　以下に、分析の結果を順に示す。

【分析結果を図表と文章で表現する。分析結果が示す客観的情報を淡々と記すことが基本で、主観的な解釈は考察の方で書く】

【まず、因子分析の結果を標準的な表の形式で示し、その表の読み取りを説明する。もっとも重要な読み取り事項は、①各因子の意味（各因子が10個の項目のどれと強く関係しているのか「因子負荷量」を読み、各因子にふさわしい名称を付ける）である。加えて、②「寄与率」から3つの因子で10個の項目の回答個人差がどの程度説明できているのか、③「共通性」から因子分析でほとんど説明できていないようなはみ出た項目がないかを確認する、ということも、必要と思えるなら読み取る。ただ数字を並べるのではなく、具体的に何がわかったことになるのか、因子分析のことを知らない人が読んでもわかるような書き方を努力すること】

【因子分析の表に続いて、それぞれの因子の因子得点について、性別・学年の組み合わせグループ別に平均値を比較する。おそらく表のままではなく、グラフ化する方がわかりやすい】

## 4．考察

【分析結果の解釈や意味、今回の調査や分析の問題点などを考えて、文章にする。この部分は、ある程度根拠のない主観的な表現でよい。自分の考えを補足的に検証するために、追加の分析を行って図表等を示してもよい。】

## 5．まとめ

【最後には、結局何をしようとして何がわかったのか、目的・方法・結果・考察すべてを振り返って簡単にまとめ直すこと。】

【もし、何か参考にした文献があるならば、書誌情報（著者・出版年・タイトル・出版社）を示す。今回は小課題なので、基本的にはそこまでする必要はない】

【別途、表紙を付けて、レポートのタイトル（自分でつける）、氏名、学籍番号、提出日、授業名などを記すこと】